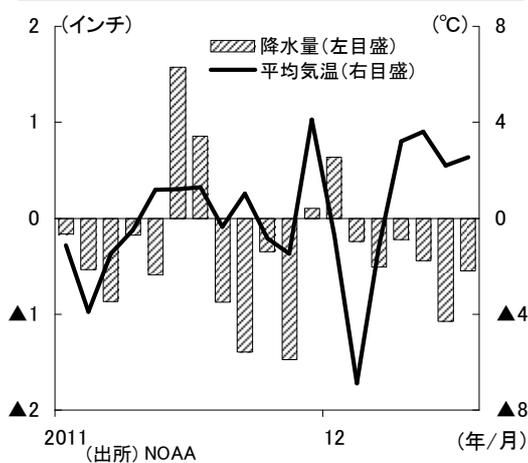


厳しい露印中の早魃

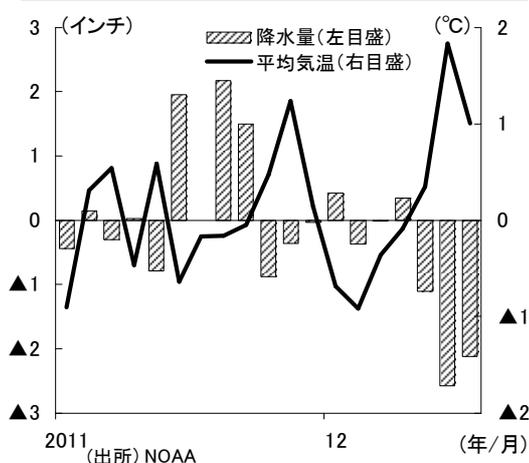
～ アメリカ同様の熱波と早魃 ～

- 今回の早魃はアメリカのみならず、世界的な穀物生産国であるロシア、インド、中国でも進行。降水不足に高温が重なりアメリカと相似。まず、ロシア南部の穀倉地帯はウクライナから北カザフスタンに至るチェルノーゼム地帯であるなか、ロシアの気象データが不詳のためウクライナを代用すると、降水量では平年差で6月▲1.1インチから7月▲0.5インチとマイナス幅が縮小したものの、依然降水不足（図表1）。降水不足は本年2月から。一方、気温は平年差でみて6月+2.2℃から7月2.6℃へプラス幅拡大。土壌の乾燥化が一段と進行し、穀物生産への打撃拡大。なお同国をエリア別にみると、黒海沿岸から北部に至る主要な穀物生産地域全体で、ほぼ同様の推移。
- 次いでインドでは、ビハール州をはじめ米作が盛んな北東部で7月に入り大幅な降雨。しかし、北東部以外では依然深刻な早魃。まずパンジャブ州やハリヤナ州を中心に同国最大の穀倉地帯である北部エリアをみると、降水量は平年差で6月▲2.6インチから7月も▲2.1インチ、気温は同6月+1.8℃から7月+1.0℃（図表2）。一方、マハラシュトラ州やアンドラプラデシュ州などの南部をみると、気温では同6月+0.9℃から7月+0.2℃と終息の兆しがみられるものの、降水量では同6、7月とも▲2.9インチ（図表3）。なお、北東部の7月降水量は、オリッサ州で平年差+17.0インチ、ジャールカンド州で同+7.3インチなど集中豪雨によって嵩上げ。穀物生産にはむしろマイナス。
- それに対して中国は全体としてみれば7月降水。しかし踏み込んでみると北京を中心とする7月下旬の集中豪雨による側面大（図表4）。平年差でみた降水量を5～6月と7月で対比すると、7月大幅に降水量が増えた地点は天津や山西省太原、河北省石家荘、内蒙古自治区呼和浩特など北京周辺。降水日も20日前後に集中。それらを除くと、ほぼ全土にわたって依然降水不足。3カ国の早魃で今後、一段の穀物価格上昇の懸念。

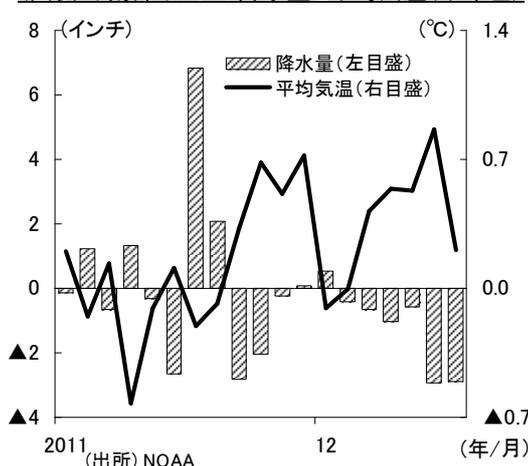
（図表1）ウクライナの降水量と平均気温（平年差）



（図表2）北部インドの降水量と平均気温（平年差）



（図表3）南部インドの降水量と平均気温（平年差）



（図表4）中国主要都市の降水量（平年差）

